

『ヨエル書』とラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会 - 第十九号

Jeff Pippenger

2025-12-25

十九番

ユダ族の獅子はイエスの呼び名であり、キリストがご自身の預言のことばを封印し、そして封印を解くという働きを強調している。黙示録第5章では、ダビデの根でもあるユダ族の獅子が、その書を開くことに勝利した。ダビデの「根」はジェシーであり、ジェシーの根はファレズであり、その根はユダであり、その根はヤコブであり、その根はイサクであり、その根はアブラハムであった。ユダ族の獅子と関連づけてダビデまたはジェシーの根が言及されるとき、それは始めと終わりという原理、すなわちアルファとオメガを強調している。黙示録第1章でイエス・キリストの啓示の封印が解かれるとき、彼の主要な特質は、彼がアルファでありオメガであるということである。彼が何者であるかということ自体が、時が来たと彼が定めるときに、ユダ族の獅子が封印した預言を解くために用いられる原理でもある。

神の預言のことばの封印が解かれることは、神の贖いのみわざの一要素であり、神はそのことばの力を用いて、みこころに従ったリバイバルを生み出される。ホワイト姉妹は、ダニエル書と黙示録がよりよく理解されるとき、私たちの間に大いなるリバイバルが見られるだろうと言っている。みこころにかなったリバイバルと改革を生み出すのは、神の預言のことばの光である。

ホワイト夫人は、終わりの時代を見据えつつ、終末に神の民の間で起こる大いなる改革に言及している。聖なる歴史におけるリバイバルと改革はすべて神の言葉から生み出され、それらの聖なる時期の一つひとつは、日曜法の直前に始まる最後の大リバイバルと大改革を指し示していた。それらのリバイバルは、神の言葉の封印が解かれることによってもたらされる。七つの雷は、ダニエル書12章がそうであったように、封じられていた。

1260という象徴に関連する離散の時期の預言的特徴を適用すると、黙示録11章では、モーセとエリヤが三日半のあいだ通りで死んだままにされていることがわかる。18節になると、神の怒りの時が到来している。モーセとエリヤは、人類への猶予期間が閉じられる直前の神の民を表している。彼らは、イエスが十字架につけられたソドムとエジプトの通りで、象徴的な1260日間、散らされている。

モーセとエリヤは、第3節から、彼らが街路で殺される第7節に至るまで、証しをする力を与えられている。ヨハネは第2節で神殿の測定を終え、その後、モーセとエリヤが「荒布」をまとって証しをする力を与えられる。エリヤとモーセのメッセージは1844年にフィラデルフィアのミラーライト派アドベンティズムに与えられ、1863年までには、その声は代々受け継がれてきた慣習や伝統の下に埋もれてしまった。彼らは三年半のあいだ、1863年以降の深まっていく暗闇の象徴である「荒布」をまとって、証しをする力を与えられた。

ホワイト夫人の「七つの雷」を第一天使と第二天使の出来事を表すものとする定義を、行に行を重ねるやり方で適用すると、私たちはメッセージを携えた天使が降りてくるところから始まる歴史を構築する。しかし、行に行を重ねて見ると、その天使は第一天使でもあり第二天使でもある。一方は1840年8月11日に片足を陸に、もう片方の足を海に置き、もう一方は1844年4月19日の失望の時に到来した。

それぞれの並行した歴史における次の道標は、ハバククの板に結びついた神の御手である。第一の天使とともに1843年の図表が作成されたが、いくつかの数字に誤りがあった。第二の天使のとき、神の御手はハバククの板の道標であり、主がその誤りから御手を取り除かれたときにそれが示された。主が御手を取り除かれたとき、そのメッセージは次第に発展し、1844年10月22日の失望の直前、エクセターのキャンプ集会で頂点に達した。

二本の線は世界的なメッセージを示している。というのも、やって来る天使は片足を陸に、もう片足を海に置き、靈感はこれが世界的なメッセージを表しているからである。その天使はまた、十人の乙女のたとえにおける遅延の時の始まりを示している。この最初の道標において、私たちはまた、神の御手が偽りを生じさせるのを見る。1844年4月19日、預言的には幻が偽ったかのように見えたが、忍耐を持った者たちは待ち、幻は遅れはしたが、偽らなかった。しかし、私たちが描いているこの線の始点では、最初の失望の偽りが、最初の道標の特徴として記される。

すると、神の御手とハバククの板という道標は、神が一つの誤りを御手で覆い、その後その誤りから御手を取り去られることを示している。ミラー派の歴史では、その誤りは1842年5月、図表が印刷されたときに神によって許容され、その後、1843年が終わったときにその誤りが明らかになったが、主が数字の誤りから御手を取り去られたのは、そのさらにしばらく後であった。その誤りは1842年5月から、最初の失望の後のある時点まで存続していた。第一の天使に関しては、神の御手とハバククの板は1842年5月に標されるが、第二の天使の歴史における御手の取り去りは、最初の失望の直後であろう。

これは、「手」という道しるべを預言的な期間として示している。その期間は、彼の手が一つの誤りを覆うことから始まり、その誤りから彼の手が取り去られることで終わる。彼の手が覆い、また取り去るこの期間は、ユダ族の獅子が預言の光に封印を施し、のちにその封印を解くという働きの例証である。彼は真理を覆い、その後、元の光と矛盾しない別の光のもとで、まさに同じ真理を明らかにされた。彼がそうされたのは、ミラー派の「真夜中の叫び」の復興と改革を生み出すためであった。

天使の到来とともに始まった待機の時は、その御手を取り除かれたときに終わり、こうして預言の光の封印が解かれて「第七の月の運動」が始まった。それはエクセターのキャンプ集会における「真夜中の叫び」のメッセージへと至り、そこでそのメッセージは大波となって広がり、やがて大失望の「閉ざされた戸」に至った。御言葉の封印が解かれることによって現れた神の力は、次第に高まるリバイバルと改革を生み出した。

1863年、ラオデキヤのミラー派運動はヨルダン川を渡ることを禁じられ、エリヤとモーセを石打ちにしたがために荒野へ追放された。ウィリアム・ミラーのメッセージはエリヤのメッセージであり、ミラーの基礎的なメッセージはモーセの「七つの時」であった。「七つの時」を退けることはモーセを殺すことであり、ミラーが打ち立てた基礎的真理を

退けることはエリヤを殺すことであった。1863年には、使者とそのメッセージは路上で殺され、そしてそれ以後、彼らを見いだす唯一の方法は、エレミヤの「古い道」に彼らの墓を探すことだった。彼らは路上で死んでいた-復活するまでは、彼らが復活するのは、「順序立てて明らかにされる」ことになっている「七つの雷鳴」の将来の出来事が、十四万四千人の歴史の中で繰り返されるときである。

第一の天使の歴史が第二の天使の歴史の上に重ね合わせられるとき、その預言的構造は、キリストの御手に従うための指針を生み出す。その御手は、真夜中の叫びの道筋の上にある光である。真夜中の叫びの最初の光は道筋を照らし、その道を上へと導くのは、御自身の『栄光の右の腕』の光である。

私は光に包まれ、地上からますます高く昇っていくように思われた。私は世の中で再臨を待ち望む人々を探そうと振り向いたが、見つけることができなかった。すると声が私にこう言った。「もう一度見て、もう少し高いところを見なさい。」そこで私は目を上げると、世界のはるか上に築き上げられた、まっすぐに狭い道が見えた。この道の上を、再臨を待ち望む人々が、道のはるか先の端にある都へ向かって旅していた。道の初めに彼らの背後には明るい光が据えられており、天使はそれが「真夜中の叫び」だと私に教えた。この光は道じゅうを照らし、彼らの足もとに光を与えて、つまづかないようにした。

彼らの目の前におられて都へと導いておられるイエスから目を離さなければ、彼らは安全であった。だがまもなく、何人かは疲れ、都のはるか遠くにあり、自分たちはもっと前にすでにそこへ入っているはずだと期待していたと言った。そのときイエスは、栄光に満ちた右の御腕を挙げて彼らを励まされ、その御腕から光が出て再臨の一同の上を揺らめきながら覆い、彼らは「ハレルヤ！」と叫んだ。ところが、ほかの者たちは軽率にも背後の光を否定し、ここまで自分たちを導いたのは神ではないと言った。すると背後の光は消え、彼らの足もとは全くの暗やみとなり、彼らはつまづいて目標とイエスを見失い、道から外れて下の暗く邪悪な世へと落ちていった。『エレン・G・ホワイトのキリスト教的経験と教訓』57頁。

キリストがその栄光の御腕を上げるとき、御自分の「手」を、御自分の民を導く御業の象徴として用いておられる。第二の天使の到来を、1840年8月11日に下ってきた第一の天使と結び合わせると、両方の天使が手にメッセージを携えていたことがわかる。

天のすべてが地上で進行している働きにどれほど関心を寄せているかを、私は見せられた。イエスは力ある御使いに、地に下って地上の住民にご自身の再臨に備えるよう警告することを命じた。御使いが天においてイエスの御前を離れると、きわめて輝かしく栄光に満ちた光が彼に先立って進んだ。彼の使命は、その栄光によって地を照らし、来たる神の御怒りを人々に警告することだと、私は告げられた。…

もう一人の力ある御使いが地上に下るよう遣わされた。イエスはその手に一つの書を授けられた。そして彼が地に下ると、こう叫んだ。「バビロンは倒れた、倒れた。」それから私は、失望した者たちが再び天に目を上げ、信仰と希望をもって主の来臨を待ち望むのを見た。だが多くの者は、眠っているかのように茫然自失の状態にとどまっているように見えた。しかし彼らの顔には深い悲しみの跡が見て取れた。失望した者たちは聖書から、自分たちが待機の時にあり、幻の成就を忍耐して待たねばならないこ

とを悟った。1843年に主を待ち望むよう彼らを導いたのと同じ証拠が、1844年にも主を期待するよう彼らを導いた。しかし私は、多数の者が、1843年にその信仰を特徴づけたあの活力を持っていないのを見た。彼らの失望は、その信仰を弱めていた。『初期の著作』246、247頁。

両方の天使は、それぞれが、合わせて一つの象徴を成す三人の天使のうちの一であり、彼らが表すメッセージの点では一致しているが、各天使は固有のメッセージも担っている。両天使とも手に「書き物」を持っており、試験を表している。「第一と第二の天使は並行して進むべきである」とは、第三の天使と並行して進むということである。

神は、黙示録14章のメッセージに預言の系列の中での位置を与えられ、その働きはこの地の歴史が終わるまで止むことがない。第一と第二の天使のメッセージは今の時にもなお真理であり、後に続くものと並行して進むべきである。第三の天使は大声でその警告を宣言する。「この後」とヨハネは言った。「私は、大いなる権威を持つ別の天使が天から下ってくるのを見た。地はその栄光によって照らされた。」この輝きの中に、三つのメッセージすべての光が結集している。『The 1888 Materials』803、804。

ホワイ夫人は、第三の天使を黙示録18章の天使であると特定し、第一と第二の天使は、黙示録18章の第三の天使によって表される預言的歴史と並行して展開するものだと示している。したがって、彼女は1840年8月11日の第一の天使の降臨を9/11と対応させ、黙示録18章の天使こそが「第三の天使」であると明言している。第三の天使は三者のうち最後であり、第一の天使によって予表されている。このため、ホワイ夫人は、第一の天使の使命は黙示録18章の天使の使命と同一であったと私たちに教えている。というのも、両者の使命は「その栄光をもって地を照らす」ことであったからである。

「七つの雷」は、第一と第二の天使の歴史における出来事の展開を表しており、それは第三の天使の歴史において繰り返される。靈感は、これらの歴史を「行に行を重ねる」形で整列させると、1840年における第一の天使の降臨が9/11におけるその降臨と一致することを示している。この整列は、二人の証人とともに食べなければならない試練のメッセージを指し示し、失望を最初の道標に結び付ける。

「七つの雷」は、失望から始まり、より大きな失望で終わる預言的な期間を表している。

第一の天使の降臨の預言的時系列を第二の天使の到来に重ね合わせると、「真理の構造」が生み出される。真理は三段階として定義され、最初と最後は同一であり、中間の段階は反逆を表す。この型に第一と第二の天使を合わせると、第一と第二の天使から成る構造が生まれ、それが黙示録18章の第三の天使を示す。そして、黙示録18章の第三の天使は、第一と第二の天使の双方の結合である。

黙示録18章の第三の天使は二つの声から成り立っている。第一の声は、9/11にニューヨークのビルが崩れ落ちたときに成就し、四節の第二の声は日曜法である。9/11から日曜法に至る期間において、黙示録18章の第三の天使は第一と第二の天使の結合を表している。事実がそうである以上、これら二人の天使の歴史を「行に行を重ねて」用いて黙示録18章の第三の天使の歴史を表すということは、第一と第二の天使を第一と第二の天使に対応させることになる。

二人の天使はいずれも第一の失望に至り、どちらの天使も預言的に関連しており、しかもどちらも天使の手にある信仰を試すメッセージを携えている。そのラインで次に示される道標はハバククの板であり、これは神の御手と直接結びついている。第一の天使のラインでは、1843年図表が1842年5月に作成されたが、第二の天使のラインには図表はなかった。図表は第二の天使の到来の時点で終わっていた。第二の天使のラインにおけるハバククの板の道標とは、1843年図表の数値にあった誤りから神の御手が取り除かれることである。

その御手は第一の天使の道標にある誤りを覆い、第二の天使の線上では、その同じ道標において取り除かれた。ゆえに、並行する第一と第二の天使の線におけるハバククの表の道標は、二つの段階を表している。第一の段階ではその御手が誤りを覆い、ハバククの表の道標の期間の終わりに、その御手は取り除かれる。遅延の時は第二の天使の到来によって始まり、その終わりは、その御手が取り除かれることから段階的に終わっていく。ハバククの表の道標は、初めにキリストの御手によって印され、終わりにもその御手によって印される一つの期間を表している。

最初の失望の時に二つの手が示され、どちらにも取って食べなければならない人を試すメッセージがある。その後、基礎的な真理を表す預言的な期間が、神の御手が覆うことで始まり、御手が覆いを取り去ることで終わる。次の道標はエクセターのキャンプ集会であり、そこで真夜中の叫びが、キリストの御手に従って至聖所へ入ろうとする者たちをより分け、清める。

キリストが至聖所に移られたとき、天に向かって御手を上げ、「時はもはやない」と誓われた。彼は、第三の天使の歴史の中に繰り返される第一と第二の天使の歴史を表す「七つの雷鳴」を封じられたばかりであった。彼は、ダニエル書12章の預言を封じられたのと同様に、「七つの雷鳴」を封じられた。ダニエル書12章では、三つの象徴的な期間の最初に、キリストが両手を天に上げ、神の民の散らしが終わるとき、「驚きの的となる者たち」となる者が清められ、供え物として高く掲げられると宣言される。いま私たちが考察している第一と第二の天使の構造は、あらゆる段階で神の御手を象徴的に現している。

彼が真理を覆うと失望が生じ、彼が御手を取り除くと光が生まれ、その光は真夜中の叫びのメッセージの光である。最初の失望から大失望に至るまでにはアルファとオメガの印があり、真理の構造のうちに示されている。初めは終わりを表し、二つの失望の間の道標は、ハバククの表の封印と解封の効果を描写しており、それはエレミヤの古き道の解封であって、完成した神殿がすべての山々の上に高く掲げられることになる日曜法に先立って神殿が建てられる、その土台を表している。真理の言葉における中間の道標は反逆を表し、麦と毒麦の最終的な分離によって表される歴史において、愚かな乙女たちの反逆が現れる。

ハバククの表という道標によって示されている反逆は、段階的なものとして描かれている。というのは、それは単一の道標ではなく、神の御手によって示された明確な始まりと終わりを備えた一つの期間だからである。最初の失望では神の御手が二度現れる。二人の天使がいて、いずれもその手にメッセージを携えているからである。次の反逆の道標にも始まりと終わりを示す御手があり、したがってその預言的性格のうちに二つの御手を持

っている。より大きな失望の第三の道標は、ダニエル書十二章がそうであったように、七つの雷鳴が封じられているまさにその箇所において、キリストが御手を上げて天に誓うことを示している。まさに、いま私たちが考察している最初の二人の天使の預言的構造の終わりを天使が画するその時点で、彼は預言的な時の適用を終わらせ、自らをダニエル書の並行する箇所に位置づける。そこでは彼は片手ではなく両手を上げている。

ダニエル書12章には、終わりの時に封印が解かれる三つの予言的期間がある。というのも、これは終わりの時に神の民に降りかかる事柄だからである。ダニエル書の最後のクライマックスとなる幻で最初に言及されているのは、神の残りの民を代表するダニエルが、その事柄も幻も理解していた、という点である。ダニエルが最後に記したのは、知識の増加がどのようにユダ族の獅子によって用いられ、理解する者として区別される神の民の間に最終的な復興と改革を生み出したかということである。彼は、ダニエル書12章の「三つの期間」の封印が解かれることと関連して、黙示録の「七つの雷」の封印を解くことによって、ご自分の民への封印を成し遂げる。

イエスは、神の民の力が散らされる三日半の預言的な日々の終わりに、すべての「不思議」が終わることを示しておられるが、それは、黙示録十一章の街路での死の三日半が終わった2023年7月を指している。今や、その不思議は日曜法に先立って終わることになる。彼は片手ではなく両手を上げて、2023年7月を示された。そうすることによって、彼はミラー派の歴史における誤りから御手を取り除かれたときと同じように、遅れの時の終わりに印を付けておられた。最初の失望はミラー派の最初の失望を象徴して2020年7月18日に起こり、そして遅れの時が始まって、彼が2023年7月に残りの民を集めるために二度目に御手を伸ばされるまで続いた。

最初の失望は、神の御手が一つの誤りを覆っていることによって表されている。その誤りとは、ミラー派にとっては、1844年10月22日ではなく1843年を特定したことであった。その失望は十二章十二節において表されている。第一の失望は、神の御手がその誤りを覆うことによって表されており、第一の失望に至ったミラー派によって型どられていた。十二節にある語は「cometh」である。待ち望み、1335に「cometh」する者は幸いである。1844年4月19日の失望に「cometh」する者は幸いである。「cometh」と訳されている語は「触れる」を意味する。ミラー派は、1843年が1844年に触れたとき、最初の失望を経験した。ダニエル書十二章十二節は、1844年4月19日の第一の失望と、より直接的には2020年7月18日の第一の失望を指し示している。

終わりの時に、知識が増し、麦と毒麦の最終的なより分けが成し遂げられ、その結果、十四万四千人を封印する預言の光の封印が解かれることが示されるときに解かれる三つの期間のうち、最初の預言期間と最後の預言期間は同一である。

七節の最初の句点は、2023年7月における黙示録11章の三日半の散らしの終わりであり、十二節の句点は、その同じ散らしの始まりである2020年7月18日を指している。アルファとオメガは、ダニエル書12章における七つの雷の歴史を、2020年7月18日の失望から始まり、象徴的な三日半後の2023年7月に終わる歴史として示しておられた。同じくらい重要なのは、アルファとオメガが最後の遅延の時の始まりと終わりを示されたとき、片手ではなく両手を天に上げ、世々限りなく生きておられる方にかけて誓われたということだ

ある。

人の子でもある神の子が、父なる神と誓いを結んでおられる。そこは、神の契約の民の物語のクライマックスが始まったまさにその場所だ。すなわち、キリストが初めて、約束をもってアブラムを召し、その約束を誓いによって確証した場所である。履物を脱ぎなさい、あなたは聖なる地に立っている！

三つの預言的期間の中央の文字は、十一節の1290年に表されている、アブラムとパウロの430年の契約の時に関する預言のオメガ的成就にほかならない。ミラー派の理解でその節に臨むと、教皇権のための30年の準備期間が示され、その後続く1260年の教皇権による迫害が特定される。アブラムの430年は、特定の国における奴隷状態と解放を表し、最初の30年は主がアブラムと契約に入ることを表している。祭司のための30年の準備は終わりの時である1989年に始まり、その30年は日曜法で終わる。そのとき、その節は荒らす憎むべきものが据えられることを示し、その後、黙示録十三章におけるヨハネの象徴的な四十二か月に一致して、神の民が1260の象徴的な年のあいだ迫害されることになる。

十四万四千人の改革運動は1989年に始まった。主が、日曜法に始まる真夜中の危機の間に奉仕するための祭司職を備える御業を始められたからである。アルファとオメガはヒデケルの水の上に立ち、両手を天に挙げて、2020年7月18日から2023年7月までの散らしが成就したとき、キリストがその神性を人性と結び合わせる御業に伴う驚異は終わると誓った。

これは、七つの雷の系列における第十章の同じ宣言である。というのも、そこで主は「時の予言」の適用を終わらせただけでなく、第七のラツパが鳴り響く日のうちに神の奥義が成就することも明らかにしたからである。ダニエル書12章の並行箇所は、散らしが2023年7月に終わったとき、両方の並行箇所でもキリストが御手を上げて誓われるのと同時に鳴り響く第七のラツパによって表されているように、神の民への封印の仕上げが完了することを示している。

ダニエル12章の三重のメッセージの最初の預言的期間と最後の預言的期間は、アルファとオメガの印を備えている。七節の第一の期間は、十二節がその始まりを示しているまさに同じ期間の終わりを指し示している。七節と十二節の間には、1989年の終わりの時から恩恵期間の終わりまでの歴史が表されている。七節のアルファの期間と十二節のオメガの歴史の間には、日曜法からミカエルが立ち上がる時までの人類の最終的な反逆が表されており、しかもそれはミカエルが立ち上がるまさにその章の中で表されている。

中期の反乱は主として反乱の外的な歴史であるが、最初の三十年は、後続する1260の期間において表される外的勢力と直接対峙する祭司たちの準備の内的な歴史である。

中間期はヘブライ語アルファベットの第十三の文字の反逆を表し、内的なものとは結び合わさり、猶予期間が続くあいだに地球上で繰り広げられる大いなる闘いの最終決戦を描く。その外的なものとの内的なものとの結合は、ダニエルの最後の幻のメッセージでもあり、ヒデケル川と、アルファとオメガのしるしをも帯び、真理の構造の上に築かれている三つの章によって表されている。最初と最後の章は、永遠に輝く星として描かれている神の民の封印を扱っている。反逆を扱う中間の章は、同じ構造のまさに中間の節である十一節

において1290年とともに示されているのと同じ歴史を指し示している。

キリストが預言の枠組みの中で御手を用いられるとき、それは多くの真理を表しているが、同時に、キリストが御自分の民を導いておられる道も表している。イエス・キリストの啓示の封印は2023年7月に解かれ始めた。その封印の解除には、七つの雷の封印の解除と、第十二章に示されているダニエル書のメッセージが含まれている。その封印の解除は、1989年に始まり日曜日法で終わる、四十節の隠された歴史の中で起こる。その歴史の中で神の民は封印され、彼らは聖霊の注ぎ出しによって封印される。聖霊の最後の注ぎ出しは黙示録第八章で示されており、そこでそれは第七、すなわち最後の封印として表されている。ユダ族の獅子は第五章で、七つの封印で封じられた巻物を開くために打ち勝った

第六の封印は、第六章の終わりに、罪のための執り成しがもはや行われぬ時期に誰が立つことができるのかという問いを投げかけた。

御怒りの大いなる日が来たからだ。だれが立っていられようか。黙示録 6:17

次の章、あるいは次の節と言ってもよいのですが、そこでは、日曜法の危機のさなかに神の御国に集められる大群衆と、十四万四千人に印が押されることが紹介されます。十四万四千人は、第六の封印の問いに対する答えです。彼らが第七章で示されたのち、次いで第八章は、第七にして最後の封印が解かれることを明らかにします。

そして、彼が第七の封印を開いたとき、およそ半時間のあいだ、天には静けさがあった。私は神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らには七つのラッパが与えられた。さらに、別の御使いが金の香炉を持って祭壇の前に来て立った。彼には多くの香が与えられ、それを御座の前にある金の祭壇の上で、すべての聖徒の祈りとともにささげるためであった。そして、その香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ちのぼった。

そして天使は香炉を取り、祭壇の火でそれを満たし、それを地に投げ入れた。すると、声と雷鳴と稲妻と地震が起こった。ヨハネの黙示録 8:1-5。

イザヤ書6章で「炭」として表され、ホワイト夫人が清めの象徴と見なしているその「火」は、祭壇から取り上げられて地上に投げ込まれる。ペンテコステの際に天から下った「火」は、「火」の舌のようなものとして表された。「火」こそが、契約の使者がレビの子らを清めるために用いるものである。

「『手に箕を持っておられ、打ち場を徹底的に清め、麦を集めて倉に納められる。』マタイ3章12節。これは清めの時の一つであった。真理の言葉によって、もみ殻が麦からふるい分けられていた。戒めを受け入れるにはあまりにも虚栄と独善に満ち、謙遜な生活を受け入れるにはこの世を愛しすぎていたため、多くの者がイエスから離れていった。今もなお多くの人と同じことをしている。今日も魂は、カペナウムの会堂にいたあの弟子たちのように試されている。真理が心に迫ると、自分の生き方が神の御心にかかっていないことが見えてくる。自分自身が全く変えられる必要を悟るが、自分を捨てる務めを引き受けようとはしない。だから、自分の罪が明るみに出ると怒り、弟子たちがイエスから離れたときのように、つまずいて去って行き、『これは聞きに

くい言葉だ. だれがそれを聞いていられようか』とつぶやく。」『The Desire of Ages』392頁.

エリヤの供え物の上に降ったのは火であり、ギデオンが御使いにささげた供え物の場合も同様であった. 清めの「火」とは神の御言葉である. 聖とされるとは、その御言葉によって聖別されることだからである. 第七の封印が解かれるときに地に投げ下ろされる「火」は、終わりの時、すなわち第七のラッパが吹き鳴らされ、七つの雷が表し、終わりの時まで封印されていたダニエル12章の三つの預言的期間によって確認された出来事が最終的かつ完全に成就する時に封印が解かれる預言のことばに与えられる権能を示している.

人類の恩恵期間の終わりの直前に封印が解かれるイエス・キリストの黙示には、七つの雷の封印が解かれること、第七の封印が取り去られること、ダニエル書12章の封印が解かれること、そしてダニエル書11章40節の隠された歴史の封印が解かれることが含まれている. そこは、天使が亜麻布の衣を着た方に、これらの不思議の終わりはどうなるのかと尋ねた、まさにその歴史である.

亜麻布をまとった人は答えて言った——あなたが2023年7月の待機の期間の締めくくりに至るとき、あなたは十四万四千人の封印の歴史に達したことになる.

彼はまたこう言った——黙示録11章の三日半の象徴的な日々の終わりに、1798年の「終わりの時」によって象徴されているように、ダニエル書の預言的メッセージの封印が解かれるだろう. そのとき三日半の象徴的な日々の終わりに開かれることになる真理は、ダニエル書の封印と開封を特定し定義している、まさにダニエル書の九節の中に見いだされるだろう.

これらの内容は次回の記事で続けます.

キリストがこの地に来られたとき、代々受け継がれてきた伝統と聖書に対する人間的解釈が、イエスにあるそのままの真理を人々から隠していた. 真理は伝統の重みによって埋没した. 聖なる書物の霊的意義は失われた. というのも、人々は不信のゆえに天の宝庫の扉を閉ざしてしまっただからである. 闇が地を覆い、濃い闇が民を覆った. 真理は天から地を見下ろしたが、どこにも神の御印は現れていなかった. 死の覆いのような陰鬱さが地を覆い広がった.

しかし、ユダの部族の獅子は勝利した. 彼は、神の教えの書を閉ざしていた封印を解いた. 世界は、純粹で混じりけのない真理を仰ぎ見ることを許された. 闇を押し返し、誤りに対抗するために、真理そのものが下って来た. 世に来るすべての人を照らす光を携えて、天から一人の教師が遣わされた. 知識、すなわち確かな預言の言葉を熱心に求めていた男女がいた. そしてそれが来たとき、それは暗い所に輝く光のようであった. Spalding Magan, 58.

律法学者とパリサイ人は聖書を解き明かすと称していたが、彼らは自分たちの考えや伝統に従って解釈していた. 彼らのしきたりや戒めは、ますます厳格なものになっていった. 霊的な意味においては、聖なる御言葉は人々にとって封印された書のように、彼らの理解には閉ざされたものとなった. Signs of the Times, 1905年5月17日.